大阪府支援教育研究会　２０１４年度　冬季研修会

２０１５年１月２４日　たかつガーデン

今年の冬季研修会は、午前午後各３分科会を行いました。多くの方に参加していただき、有意義な研修とすることができました。講師の皆様、参加された方、どうも有り難うございました。

A　困っている子どもの背景と支援　～　矯正教育の現場から

宮川医療少年院　　宮口 幸治氏

障がいのある非行少年たちの矯正教育プログラムを担当した宮口先生の講演は、とても示唆深く、有意義な研修でした。講演の中で「先生方のお力で、加害者・被害者を一人でも減らして欲しい」という言葉が強く心に響いています。

在学中は、無気力やふざけている問題児として見られて様々な不適応を起こし、被害者を作り警察に逮捕されて、少年院に入ってから初めて障がいがある事に気づかれる。

そのような少年たちの特徴としてみられることとして次のようなことを挙げられました。「認知機能の弱さ、感情理解の乏しさ、融通の利かなさ、不適切な自己評価、対人スキルの乏しさ　＋不器用さ」　彼らは特別な存在でなく、支援がなければ悪い誘惑から逃れることができないと語られました。

前半は、子どもの理解についてのお話。後半は具体的な支援＝教育プログラム「認知機能強化トレーニング」などのワークを交えてのお話。数か月のトレーニングで、自己理解が進み自信がついて来ると、最初は形にならない自分自身の絵がだんだんとしっかりした絵になって行くのだそうです。それらのトレーニングの特徴は、集団生活の中や関係性の中で感情コントロールや対人マナーを学ぶというものでした。集団の中で傷ついている子は集団の中でしか治せないとも話されていました。　詳しくは、 http://www.cogot.net をご覧ください。また次の書籍をご紹介いただきました。

「不器用な子どもたちへの認知作業トレーニング」　三輪書店

「教室で困っている子どもたちを支える７つの手がかり」明石書店

「コグトレ　みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング」三輪書店

B　障がいのある子どもの性と生　～明るく元気な性教育をめざして～

高等部卒業後の学びの場「ぽぽろスクエア」千住　真理子氏

性教育を大切だと感じながら、どのようにして子どもたちに教えればいいかを悩んでいる人はたくさんいると思います。障害者権利条約第２３条で恋愛や家庭を持つ権利、性教育を受ける権利を認められている子どもたちが、たった一つの命、一度きりの人生を輝かせるために、千住先生は、友だちといっしょに明るく元気に学ぶ性教育のお話をしてくださいました。

子どもたちは障がいに関係なく思春期が訪れ体や心が変化します。自分の体の成長を嫌がらず自分の体を大切にする、自分の存在を大切に思えるよう、小学校低学年からの性教育が求められています。千住先生の授業で使用する手作りの教材はどれも温かみのある素材で子どもたちにもわかりやすく作られていました。その教材を使い、自分のからだや異性のからだを知り、自分の体を大切にすることを学びます。小学部では、体の部位やその名前を知りボディイメージを育て、思春期には体の変化、人との関わり方、命の誕生など大人になることに期待が持てるよう学んでいきます。

後半は、体のコントロールがうまくいかず過敏さやいらだちから絶えず体が緊張している子どもたちがリラックスしてホットできるようにベビーオイルにアロマオイルを入れ行うマッサージ「快」の体験や、より良いひととの関わり方を考えたり、関係性を深めたり、思いやりやお互いが尊重し合うこと学べるサイコロタッチなどの遊びながら学べるゲームなどたくさんの実践を教えていただきました。先生の性教育は障がいがあるないに関わらず全ての子どもたちに学ばせたい性教育のお話でした。ありがとうございました。

C　ユニバーサルデザインの授業づくり

～みんなが『わかる・できる・使える』授業に向けて

大阪府教育センター　主任指導主事　石村　和彦氏

「ユニバーサルデザイン」の授業づくりが広がり、授業改善が進みつつあることを踏まえ、今求められる「学び」とは何か、ユニバーサルデザインの工夫はどうあるべきか、などについてのお話をいただきました。

実際に国語の教材をもとに、子どもたちに学習意欲を持たせるにはどう授業を展開したらよいか、グループで話し合うワークを交えながら、具体的な指導・支援のありかたを提示されました。子どもたちに豊かな学びの場を提供するために、次のような支援が考えられるとお話しされました。

1,「つけるべき力」は何なのかを確認する
2,達成感・成就感を味わわせるしかけ作り
3,単元計画の視覚化
4,授業の初めに本時のめあて・ねらいを示す
5,内容のスモールステップ化
6,センテンスカードの利用
7,発言の前にノートに書く
8,板書の構造化　　9,暗唱活動
10,ペア学習、話し合いなど　　11,安心して発言できるなかまづくり

ただ、メソッドをつかえばよいというものではなく、マニュアル化せず、一人一人に応じた指導・支援が必要であるというお話でした。

ユニバーサルデザインとはあくまでも手段であり、それが目的ではないこと、「21 世紀を生きる力」を子どもたちにつけさせるため、アクティブラーニング（課題解決型学習）によって、思考力・学習意欲等を育てることの必要性を強調されました。

ユーモアの中に示唆に富む深いお話があり、あっという間の 2 時間でした。

D　就労を通じて社会的自立をめざす本校の取組み

大阪府立たまがわ高等支援学校　富永　誠校長先生、寺田侑平先生

たまがわ高等支援学校の学校紹介と就労に向けての取り組み、そして卒業生や生徒の様子についてお話をして頂きました。そのなかで、二つのお話が心に残りました。

ひとつめは、同窓会の日程のことです。たまがわ高等支援学校では毎年１０月の日曜日に同窓会をしているのですが、月曜日が体育の日で、土曜日の休日と月曜日の祝日にはさまれ、飛び石の休みになるので、体育の日に同窓会をしたいとの意見がありました。しかし祝日は勤め先が休みでない人もいるので、日曜日の方が休みやすいとの意見があり、同窓会はそのままの日程となりました。卒業した人たちの仕事に対する責任と、同級生と会えることを大切にしたいとの思いが伝わってきました。

今一つは、入学後の進路変更（退学）の事例です。その生徒は入学説明会に欠席し、入学式にも遅れてきました。５月の連休の後も休みがちで９月からはまったく登校しなくなりました。学校が家庭訪問等を行う中で、つぎのようなことが分かりました。その生徒は、「私はこんな学校に入学するんじゃなかった」と言っていました。たまがわ高等支援学校が就労に特化した支援学校ということを十分認識せず、不本意に入学してきたようです。結局この生徒は、残念ながら退学してしまいました。

このことから、中学校段階での進路指導についての取り組みと、本人自身の障がい受容の大切さについて考えさせられました。生徒とともに考え、出来るだけ自己決定を促すことの大切さとともに、進路指導の責任の重さを感じさせられました。

E　算数に苦手さのある子どもへの支援
～脳からみた算数の学習とつまずき解消法～

ＤＤサポートひらかた コーディネーター
元大阪府立交野支援学校　指導教諭　近藤 春洋氏

現代社会は、numerate society(数を理解し、使用できないといけない社会)であり、数を理解し使うことができないと、就労できないなど困難が多くあります。算数障がい(ディスカリキュリア)については、計算がうまくいかない＋ 数処理困難がキーワードであり、“なぜ出来ないのか”をしっかり理解して子ども達に接することが大切だとお話しされました。

「できひん（n)」「わからへん(ｎ)」「しらん（n)」の「子どもの３Ｎ（学習性無力感)」に対して、いろいろなアプローチを試み、適切な学習支援を行うこと、人と比べるのではなく少し前の自分と比べる（絶対評価）ことが必要だと話されました。

「できるようになったぁ～」「すごいわ！」と誉めることで、子どもは自信を示す発言をするようになり、子どもの心の中にできると思う心（自己効力感）が育つようになる。

脳機能の研究から、算数障がいのある子どもは、空間・時間・数の認知処理能力に機能的障がいがみられるとお話しされました。空間認知が弱く算数につまずきがある場合の学習支援法などについて、具体物や半具体物を使うこと、演算数値と結果を結びつけるドリル型学習ではなく操作を応用するストラテジー型学習で本質的な理解が進むようにすることが必要だと、詳しくお話しいただきました。

そして、発達障がいのある子どもへの課題設定の留意点として以下のことを挙げられました。１,無誤学習（初期課題では、ヒントを沢山出して間違わないようにする）　２,多段階学習（細かなステップ）　３,インタースパーサルーニング　４,プロンプイフェーディング　５,エンリッチメント（豊かな力をつける）

有意義なお話が多く、あっという間の２時間で、シリーズ化して欲しいという声も多くありました。

F　研究部担当　各地区からの実践報告

外部専門家と連携した支援・指導の取り組み

～「自立活動アドバイザー派遣事業」を通して～

堺市立上神谷支援学校　島津　雅子先生、井上　有里先生

「外部専門家との連携について」、「事例紹介」、「連携の成果」、「今後の課題」の４項目に分けて説明をいただきました。“自立活動アドバイザー派遣事業”とは堺市独自の取り組みであるそうです。

「外部専門家との連携について」では、特別支援教育とは“校内のチームワークと地域のネットワークにより行われるものである”という前提の下、特別支援コーディネーターの役割として医療・福祉・労働等の機関との密な連携と、支援部という分掌を作り対応していることを話されました。次に、学校が依頼した巡回相談で、ＯＴ・ＳＴが派遣され医療とは違うアドバイスをもらっていることを２件の実践報告とともに報告されました。４月に巡回相談の希望調査を担任に募り、相談後に担任と話す時間が無い場合が多いので、ビデオレターにて改善方法等のアドバイスをもらい担任に伝えている工夫をしているとの報告でした。

連携の成果として、指導や支援の方法を繰り返し助言してもらうことで学校全体の専門性の向上に繋がっており、年度末にアンケートを取ると、相談者の大半が満足であるとの回答を示したとのことでした。今後の課題としては、助言いただいた内容を、そのまま実践するのではなく、教育の立場で情報を活かし、授業づくりや授業改善に繋げることであると結ばれました。

支援学校高等部における音楽授業のユニバーサルデザイン

大阪府立八尾支援学校東校　　山本　耕平先生

「授業にまず興味を持ち、いかに参加への意欲を高めるか、心のハードルを下げるか」を支援学校高等部音楽でのユニバーサルの視点から実践報告をされました。

ユニバーサルの大切な視点として、構造化（主体的な参加）・視覚化（聴覚記憶の負担軽減）・協働化（生徒同士の関係作り）を挙げられ、これらを軸に授業をパターン化し実践しているとのことでした。例えば、パワーポイントを使用し、字の大きさ＝声の大きさ、字の改行＝音階などの視覚的な工夫や、カラオケの導入、エアギターを取り入れエアバンドを結成し発表会を行うなど、常に子どもが興味を持っているもの、好きなものをチェックし授業に取り入れているとのことでした。

まとめでは、授業づくりにおけるユニバーサルデザインとは、目標を下げたり、内容を簡単にしたりするものではなく、例えば登山する場合、目標となる頂上は変わらずそこにある上で、登山道を誰でも登れるような、広くて舗装された、登りやすい道へと整備することであり、さらに個別の支援において、最短ルートを使うとか、車、あるいはヘリコプターを使って頂上まで到達できるようにすることを考えていく、といったイメージであり、授業づくりも同じなのでは・・・と話されました。最後の質疑応答では、山本先生が作られたパワーポイントをぜひ活用させて欲しいとの声も上がり、大変有意義な実践報告でした。